

平成12年6月30日—にぎやかに交流！

第26回 静中・静高関東同窓会総会・懇親会

「静岡と静高」を楽しく話された三木卓さん



東京駅八重洲口近くのさくら銀行呉服橋ビル八階
「ひょうし俱樂部・東京」に一五〇余名が集い、
午後六時から三時間大いに盛り上がった。

静中・静高 関東同窓会 報

静中・静高関東同窓会
会報 第50号
平成12年12月15日発行
編集人 上杉重吉

総会は校歌斉唱で幕を開け、この一年の間に他界した42期宮澤次郎初代会長（11・7・3没）、53期奥野孝元副会長（11・7・27没）、67期成岡英彦元副会長（12・1・20没）、59期奥澤徹会長（12・3・24没）、そして46期川村春雄本部同窓会長（12・6・1没）に対して全員で黙祷を捧げた。

続いて、77期野方重人副会長の議長役で議事をすすめ、87期薬科名雄理事が昨年度事業及び決算報告、71期後藤弘枝と89期鳥巢修両監事が監査報告をおこない、承認された。今年度事業計画と予算案が薬科理事から発表されたが、内容は静岡同窓会本部からの支部助成金五割削減という現実を踏まえた厳しくも地味な運営計画であった。

今回の総会は奥澤氏が会長

関東同窓会が誕生して25年、会報も創刊号（一九七六年六月）以来、会員皆様のご協力で50号を数えることになりました。この記念号以降も全会員の絆となるよう！

職任期半ばで逝去されたことに伴い、次期会長を選出する場となった。その結果、60期上杉重吉副会長を新会長に、64期野沢正憲氏を新副会長にとの提案が、満場一致で承認された。

懇親会に入る前に、作家の三木卓さん（70期・本名富田三樹）をゲスト・スピーカーにお迎えした。三木さんは昭和四十二年に詩人に与えられる最高の賞といわれるH氏賞を皮切りに本年度読売文学賞まで九つの文学賞と紫綬褒章を受賞され、名実ともに大御所の域に達して、温厚な御人柄で高い人望を得ている。三十分と短いスピーチであったが静

高に因んだお話は聴く人の耳を捉えて離さず、しかも全員が母校を誇らずにはおかない、という気持ちになるよう



な内容だった。

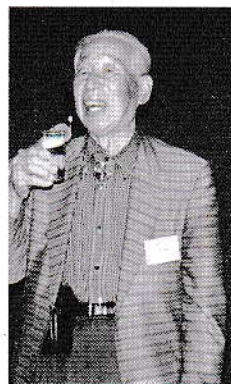
懇親会は冒頭で静岡本部同窓会の67期安池得之副会長と母校86期松山康夫教頭先生から来賓祝辞を頂戴した。

卒業生の誰もが抱いている教頭先生の印象とは違って松山先生は実年齢、風貌ともに若く、会場から驚きの声があがったほどで、微笑ましい一瞬であった。

当日出席者中の最長老43期西沢純三大先輩（右の写真）と最若手106期大工原孝則氏の乾杯の音頭で歓談に入った。この後、次期当番幹事79期上田尚亮氏、野崎喜吉氏、安江經和氏、杉本充俊氏、そして今秋の本部同窓会当番幹事を代表して静岡から参加された志田洪顕氏が挨拶に立った。

今回はめずらしく現役の大学生が5名、81期の藤山昌弘先生（同窓会事務局長）のお声がかかりで壇上に集合してもらい、自己紹介などした（下の写真）。

会場は50名収容するにはやや狭く感じたが、逆に密着度が高く、参加者同士の会話がはずみ、より一層盛りあがり



をみせた。最後に、73期山梨由記氏に再度ご登場願ひ、校歌と応援歌第一を斉唱、散会した。（78期 鈴木藤男）

◎本年の総会・

懇親会のためご尽力くださった恒生尚敬・鈴木藤男両氏をはじめ当番幹事の78期の諸兄姉に心から御礼申し上げます。

◎後日、藤山先生からいただいたお便りの一部……

「総会に出席した大学生も本当に楽しそうで、多くの先輩諸氏に暖かく迎えられる喜びを口々に語っておりました。こ

いう場に出させていただと、歴史の重みと、後輩を思っ下さる同窓生諸氏の熱い思いを感じさせていただけます。この思いをさらに広げられるようがんばっていきたいと思います。」



平成12年度総会（6月30日）出席者（敬称略）

母校教頭	松山 康夫	本部副会長	安池 得之	本部幹事	藤山 昌弘	来賓	奥澤八重子	43期	西沢 純三	50期	丸尾 文治	51期	原崎 郁平	52期	服部 雅雄	53期	大石 巖	小野 一夫	橋本久仁寿	54期	安東 哲夫	56期	清水 逸郎	57期	岩井平一郎	影島 利邦	月見里礼次郎	59期	清水 汪	60期	有田 克己
上杉 重吉	堤 崇	61期	大石 次男	清水 酒郎	清水 澄夫	濱田 茂明	山崎 和夫	64期	岩本 吉雄	佐野 旭	野澤 正志	66期	石川 隆亮	大塚 修弘	大坪 信之	大村 敏夫	河守 輝雄	田中 俊男	中島 睦生	西田 尚史	原野谷朋司	藤原 朝則	藤原 隆二	増井 和夫	武藤 勇	安池 智策	67期	朝倉 勇	朝比奈正三	大石 修而	
梶原 由三	川上 剛二	黒田 秀幸	小坂 博	児島 英男	小杉 弘	鈴木 敏行	長倉 孝三	丸山 英久	山岡 進	68期	荒谷じつ子	岩瀬 順郊	河口 浩	北村 公一	鈴木 俊彦	瀬堂川 徹	高橋 俊見	林 明宏	吉崎 英輔	69期	神谷 貞子	原田 淑子	松島 玲子	70期	石山 博	北村 孝	久沢 正雄	小林 広子	清水令一郎	鈴木 明次	関 哲男
田中 宏志	中村 龍二	三木 卓	宮本 達司	村松 勝治	71期	伊東 勝	後藤 弘枝	佐藤 利治	実石 欣哉	矢部 正和	72期	夏目 雅之	深田 均	73期	後藤 孝子	鈴木 良明	中川 明久	仲川 信正	西本 昇平	松下 勝朗	三浦 英夫	山中 博司	山梨 由記	75期	佐藤 修二	鈴木 正孝	76期	鈴木 浩	77期	石間 啓一	大村 信子
後藤 嘉代	小長井奎幸	柴田 哲男	清水 雅尚	高谷 信之	仁科 光司	野方 重人	三浦 位通	78期	芦沢 孝作	石井 博之	石塚 寿子	今村 史子	河辺 正安	鈴木 藤男	次田 肇	友安 昭	垣生 尚敬	松下 圭佑	村松 洋子	安間 孝信	山上 晴重	上田 尚亮	志田 洪顕	杉本 充俊	土屋マユミ	野崎 喜吉	安江 経和	80期	角谷 勝彦		
81期	稲村 直彦	高山 貞和	本多 英一	85期	池田 幸司	87期	石川 嘉和	高橋 宏	西野 勝明	薬科 名雄	89期	鳥巢 修	92期	山野 直文	94期	石崎 秀和	亀山 晴信	95期	石井 克昌	106期	大工原孝則	瀧 徹哉	110期	吉沢かおる	113期	関 匡史	秋田有美子	116期	花村美穂子	村本江里奈	

新役員一覧

(平成十三年三月まで)

会長	上杉 重吉 (60期)
副会長	野沢 正憲 (64期)
理事	田中 俊男 (66期)
	野方 重人 (77期)
	荒谷じつ子 (68期)
	大長 智 (70期)
	浦田 彰 (71期)

監事

清水 雅尚 (77期)	垣生 尚敬 (78期)	深津 俊郎 (85期)	石川 嘉和 (87期)	高橋 宏 (87期)	藁科 名雄 (87期)	荒井 千明 (90期)	後藤 弘枝 (71期)	鳥巢 修 (89期)
-------------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------	------------

同窓の誼を大切に、 助け合って、力強く前進しよう！



右から野沢副会長、上杉会長、野方副会長

会長に就任して……

60期 上杉 重吉

昭和五十年に発足した関東同窓会も四半世紀を数え、初代の宮澤次郎会長(42期)が十四年間、第二代大石巖会長(53期)が九年間、そして奥澤徹氏(59期)が平成十年春から第三代会長として、夫々の発展のために大変な努力を続けてこられたことは周知の事実であります。

本年三月、奥澤氏が任期なかばで急逝されたので、六月の総会において不肖私が会長職を引き継ぐことになりました。お三方には到底及ばぬながら任期中は全力を尽くして会長としての責務を果たす所存であります。

しかし私も副会長として十八年、会報の編集を担当して約十二年、自分なりに頑張ってきましたが、心身の衰えを自覚せざるを得ない齢となりました。来期には是非若い方にバトンタッチして関東同窓会がより魅力あるものとなるよう、運営の活性化と発展を切に願うものであります。

会員諸兄の御協力、よろしくお願い致します。

副会長就任挨拶

64期 野沢 正憲

去る六月三十日開催された総会において奥沢会長急逝による上杉重吉副会長の会長昇任に伴い、多数の理事の推挙によって浅学非才の小生が伝統ある静中・静高関東同窓会の副会長に就任させていただいた事は誠に身にあまる光栄と存じます。

関東同窓会の発足二十五周年の節目を迎えて

副会長 野方 重人(77期)

関東同窓会は昭和五〇年(一九七五年)東京会館において結成発足し、今年で二十五周年を迎えました。現在会員数約三千名を擁する静中・静高同窓会の最大の支部となつています。

私達はまず以て、「年齢、職業などの違いを超えて先輩後輩が人間関係を深める場として意義あらしむべし」との建会の精神の実現に努力された先輩諸氏に深く感謝すると共に、今後益々意義ある活動をしていくことが私達に課せられた責務であると考えています。

小生の力では、諸先輩の如く力強く、またなごやかな会を一層発展させることができず、どうか分りませんが、この不況の中でも何か一つ成果をあげるべく努力し、次の役員にバトンタッチして行きたいと決意しております。どうぞ会員諸兄の御引立てよろしく御願ひ致します。

本年三月会長任期半ばに於いて奥沢会長が逝去されました。「若い期のやる気のある同窓に声をかけ、私ども役員と一緒に頑張って会の活性化について頻りに会合を開き、役員に若手を起用し現在幹事のいない期を対象にその期の有力な人物の発掘に力を入れた」との活動方針の下、会長自らがリーダーシップをとって活発な活動を始められていた矢先の御逝去でした。要の会長を失ってしまったことは本会にとりましてまことに残念であると同時に大変な損失でした。ここで改めてご冥

福をお祈り申し上げます。

私達役員会は、本会の業務に精通されておられる上杉重吉氏に会長をお願いして新体制を整え、奥沢前会長の遺志である活動方針に従って引き続き活動を続けていくことにしました。

このようにして役員一同結束して従来どおりの活動を開始しましたが、日本経済の予想外の長期に渡る停滞の影響のためか会員の会費納入状況が芳しくなく、また同窓会に参加することの意義さえ理解されていないと疑わせるような現下の状況です。

私達役員は引き続き各期の核となつて戴ける会員の発掘と同窓会参加の意義について啓蒙活動を活発に行きつもりですので、会員の皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。

なお、関東同窓会としてインターネット上にホームページを開設(23ページ参照)しましたので、これを積極的にご覧いただきたいと思ひます。

事務局を担当して……

薬科 名雄(87期)

早いもので私が関東同窓会の事務局を担当させて頂いてから十年余となりました。大石会長の就任時より、奥沢会長・上杉会長につかえ、現在に至ります。

はじめのころは、奥野副会長の会社の会議室に、役員が集まり、色々と多数の宛名書きをしたことなどをなつかしく思い出します。その後、総会の案内状や会報の発送は宛名がシール化され、各期幹事と事務局が担当し、現在は外

関東同窓会の

二十五年間の想い出

68期 荒合じつ子

関東同窓会が始まった頃の女子の幹事は、71期後藤弘枝さんと2人だったので、上級生達がよく声をかけてくださり、出席するのが楽しみでした。

当時、42期宮澤次郎トッパンムア(現トッパンホーム)社長を会長に、大勢の先輩達が会を盛大にするべく、力を出して下さった。53期奥野孝大雄社長が事務局を引き受

注となつております。本年度後半からはホームページも開設され、将来はコンピュータ画面を通して会報が読まれる時代がくるでしょう。

時代とともに維持発展の手法は変わっても、母校への誇りと愛着は不変です。

なお、本業のかたわらでのお手伝いなので、不手際等々にて会員の方々には少なからず御迷惑をおかけしてしましたが、今後とも精一杯の努力を惜しまない所存ですので、皆様の御協力よろしくお願い致します。

け、社員の山田さんが協力して名簿作り、幹事会・総会の準備まで一手に引き受けてくれました。総会の準備の手伝いに上野の会社に何うと、帰りは「ぼんた」のタンシチュウ、深川の「伊勢喜」のどじょうなど、下町のおいしい店へ案内して下さい、手伝いの幹事達を楽しませてくれました。

総会には、67期の人達が成岡・梶原さんを中心に大手手伝つてくれ、おでん(青のりオカ力をつける)、黒はんぺんのフライ等、食糧不足で、

Ⅱ各期幹事一覧Ⅱ

幹事が変更の場合は事務局までお知らせください。特に幹事未定の期は至急選出してご連絡を！

43…西沢純三 44…高橋真一
45…鈴木弥門
47…杉山栄一 48…原崎進一
49…菅沼 栄・杉本久敬
50…丸尾文治 51…佐伯正剛
52…服部雅雄・廣川 聡
53…月見里得知郎・柴崎芳二
54…安東哲夫・居初良雄
55…相川富士雄・法月重雄
56…清水逸郎・萩原達雄
57…若井平一郎・影島利邦
59…青木静男・原 淳
60…堤 崇・山本雅之助
61…大石次男
62…63…木下景一
64…65…野沢正憲・佐野 旭
66…田中俊男
67…朝比奈正三・小杉 弘・鈴木 敏行
68…荒谷じつ子・吉崎英輔
69…宮崎吉英・山本龍男
70…大高源之丞・大長 智

71…海野幸雄・後藤弘枝・篠原直・浦田 彰

72…桜井亮介・深田 均

73…山中博司・山梨由記・後藤孝子

74…佐藤鐘司・藤原経史

76…酒井孝太郎・鈴木 浩

77…野方重入・三浦位通・清水雅尚

78…鈴木藤男・垣生尚敬

79…上田尚亮

80…吉野卓史

81…鈴木素明・萩原英昭

82…堀内淳司 83…山本雅敏

84…浅川祥子

85…池田幸司・深津俊郎

86…成岡和美・井出慎吾

87…薬科名雄・石川嘉和・高橋 宏

89…鳥巢 修

90…荒井千明・米澤宣行

92…山野直文

93…岡村幸彦・大羽章弘

94…松野敦子

96…奥田規之・細沢 優

97…清水智人

107…小泉輝武・開発啓之

◎各期幹事のご活躍と、より一層のご協力を期待！

◎関東は広くて、中々友人と会うことができない。

◎同期会のチャンス是非作って、楽しい集いを！

◎幹事未定の期：46・58・75・88・91・95・98・106

育った私たち世代の郷愁を
そその品々を静岡から取り寄
せ、売店を作り、名物の安倍
川餅、わさび漬、塩津の小
まんじゅう、黒はんぺん、鰹
の角煮等々を売って会を盛り
上げてくれました。

種々な会ができ、ハイキン
グの会は、53期月見里得知郎
さんのお世話で三、四回やり、
楽しませてもらいました。ゴ
ルフの会は、67期成岡さんが
幹事になり、東名カントリー
や伊豆大仁カントリー（66期
安田正弥支配人のお世話）で
数年続きました。宮澤会長が
短パンにハイソックス、ブレ
ザーといつもダンディーに決
めていらつしやった姿がなつ
かしく想い出されます。

その後、53期大石巖新日本
証券社長が会長となり、箱根
カントリーで秘書の山崎さん
のお世話になりながら泊りの
楽しい会が続きました。一昨
年59期奥澤徹さんが会長とな
り、東松山カントリーでやつ

た後、会長の急死で次回から
77期が中心になり、清水雅
尚・仁科光司さんが幹事を引
受けてくれる事になりホッと
しています。始めたばかりの
私も、仲間に入れて頂き、迷
惑をかけたが二十数年続け
て楽しませて頂き感謝で一杯
です。

マーチングバンドの会をや
つていらした、42期岩波信平
東電社長さんが、毎年行わ
れる武道館での大会に幹事達
を一番良い席に招待して下さ
ったこと、47期杉山栄一さん
が何号かの会報に、65年頃か
ら日本は混乱期に入ると書か
れた通り、バブルが弾けたこ
と（趣味で占いを勉強してい
るからと）、我が家族のこと
を占って指導して下さい、子
供達も皆幸福な家庭が築けて
いること、種々楽しいことば
かり。平凡な主婦だったのに
ほんとうに勉強させて頂きな
がらも楽しませていただいた
、二十五年でした。

**出費の多い年末年始、恐縮至極ですが
平成十二年度の年会費三千円の納入を
同封の振込用紙でお願いいたします！**

その後の同窓会活動

（平成12年5月・11月）

◇役員会

5月12日（金）会場の下見
を兼ねて12名参集。

総会の段取り、運営をはじ
め諸業務につき協議。

◇会報49号出来 郵送

6月1日（木）

◇第21回印高会ゴルフ会

6月16日（金）

箱根カントリークラブ
参加者：12名

優勝：石間啓一（77期）

2位：荒谷じつ子（68期）

3位：松井義之（77期）

◇役員会

6月23日（金）

ひょうご倶楽部

10名出席し総会準備等。

◇第26回関東同窓会総会

6月30日（金）（別掲）

◇役員会

8月4日（金）

銀座クルーズ・クルーズ

16名出席し、総会報告、反
省、新体制の打合せ等。

◇幹事会

9月8日（金）

5名出席、種々協議。

◇中部支部総会・懇親会

9月29日（金）

ホテルプリシード名古屋
上杉会長出席。

◇役員会

10月11日（水）

新宿・旧制静岡同窓会事務
所。6名参集し協議。

◇平成12年度同窓会総会

11月11日（土）

ホテルアソシア静岡タミ
ナル。上杉会長出席。



好天の下、箱根の自然とプレーを楽しんだ第21回ゴルフ会

同期会など

五六期

平成十二年の関東地区同期会は十月二十四日(火)午後一時から三時間、公務員共済の「ホテル東京」で開かれた。出席者は、青木良文、石塚由雄、大野日佐太、奥野進、川崎博、北村甫、清水逸郎、鶴岡英彦、成田六郎、西脇光夫、萩原達雄、萩原文平、牧大勝三、松田一郎、横森桂の十五名。直前になって出席できなくなった萩原仁君は会費を寄付してくれた。

この一年の間に関東地区では橋本保二君と山崎勝吾君が亡くなられた。ご冥福を祈って黙とうをささげた。

懇談は、萩原達雄君のあいさつと彼の音頭による乾杯で始まった。横森桂君は久しぶりの出席だったので話がはずんだ。数人ずつの輪ができていろいろと話合った。その中の一つに景気対策のことがあった。いま景気が上昇しないのは個人消費が停滞しているからといわれている。これ

は、国民が今の生活レベルに満足しているからである。景気対策は一体誰のためだろう。外国の口車に乗って国の借金を重ね、無理に景気を上昇させようとするのでは、国家百年の計を誤ることではないだろうかなどと話し合った。来年も同じ会場と同じ十月の火曜日の二十三日に開くことを約束して散会した。(清水逸郎)



←56期
↓61期

六一期 関東地区同期会

長く続いた暑さも去った九月二十八日午後六時、銀座キヤピタルホテル新館に、岳南健児十八名が顔を合わせた。

六一期同期会は、毎年四月に静岡市で開催されているが、十年前より、関東地区在住者による同期会も、二年に

一度開催している。

今年はその開催年で、静岡からは、加藤光成君が遠路わざわざ参加してくれた。

幹事の太石次男君の開会の言葉の中で、「今年になって、宇都宮道利、立花幹夫、花見久の三君が亡くなられた。」との報告があり、全員で黙祷

をささげた。

清水泗郎幹事、加藤光成君の挨拶があり、「七十を過ぎれば何時どうなってもおかしくない、健康にはお互い十分に気をつけよう。」などと話し合った。

また、八木貞二君が勲二等瑞宝章を授与されたことが披露され、全員で祝杯を上げた。

なお、今まで消息が分からなかった安藤厚君が初参加し、五十五年ぶりに再会できたことは喜ばしいことであった。同期生の中には、まだ元気で現役を続けている方が何人かおり、忙しい為の欠席もあったが、ますます元気で頑張っている。

同期の関東地区在住者で、今回の通知をしたのは四十五名で、出席は半数に満たなかったのは残念であったが、反面、懐かしい友と、久しぶりにゆつくり歓談ができた。

お互い話に夢中になって時の経つのを忘れ、予定の時刻を大幅に超過してしまった。

名残りは尽きなかったが、山崎和夫君の音頭で校歌を斉唱し、再会を約して閉会した。なお、現在の校歌は、一番



のみとなっているようであるが、我々には一種の郷愁もあり、いつも四番まで唱うのを常としている。(濱田茂明)

写真、前列左から大石次男、安原徹治、安藤厚、加藤

六四期

我々はこの世に生を享けて今年中に七十歳になる。自分の気持ちの上ではまだ四、五十歳位の感じだが、孫達に「おじいちゃん」と呼ばれたり、幼稚園の運動会で跳箱を跳んで両手を挙げて直立した姿を見ると我老いたりと思う。

静岡中学に入学して六年間通学した頃のことは、ついこの間のことのように思い出せるのに。同期会はその出発点である。皆が時間的にゆとりを持つようになった。昔、若い頃は同期の友の活躍を聞き、「よし、俺も頑張るぞ」と競争社会の中でビラミッドを登ろうとした。自分のため家族のため、やみくもに働いた。同期会はいろんな人生があったけど結局自分なりの幸福をつかんだやつが一番なんだ。社会的ポストやお金なんかさほどのものでないことを

光成、八木貞二、清水潤郎、西田駿之介、稲森慎一。後列左から萩原将弘、君島敏男、奥野泰助、河合純四郎、山崎和夫、諸田実、大村富士男、天野昭、清水澄夫、濱田茂明。

実感させてくれる。

今年も七月七日に田町の「道灌かがり」で同期の集いを開催。新同窓会長の上杉重吉先輩を招待し、二十三名の仲間が集まった。入院中の渡辺素夫幹事の後任佐野旭君の司会、久しぶりに出席した望月昌君(宇宙開発事業団)

が乾杯の音頭を取り、十数年の来し方を淡々と語った。検査入院のため欠席した名波君の差し入れでいつものように黒はんぺんと玉ねぎのフライに皆、故郷と五十五年前に戻った。

各人の近況報告も堂々として感心することしきり。名物男の鈴木明郎君の校歌の歌詞を変更せよとの意見には拍手。現在の一番しか歌わないのも不可思議との声多数。アルコールの量とともに大い



に盛り上がった。栗田行雄君、二科展で初入賞、お目出度う。最後に望月康逸君の発声で「岳南健児」を斉唱し散会した。他の出席者：仲野実、柳田堯、村上喜代一、渡辺宏一、塚本光彦、竹内豊、神谷武男、杉本哲、永田進一、吉井駿亮、山本和彦、益頭尚文、桜井富士男、松下一雄、松島玲子、長谷川直和。(野澤正憲)

●十月六日、小倉磐夫君(東大名誉教授)が食道ガンのため逝去されました。謹んで御冥福をお祈りします。

67期 卒業五十周年記念同期会へお誘い

▽日時 平成十三年四月十四日(土)
▽場所 静岡グランドホテル中島屋

(電) 〇五四二五三一五一

詳細は、開催にご尽力頂いている静岡の世話人会から、案内状が直接手元に届きます。

四十周年は、平成三年九月二十八日に開催し、一二九人が出席。四十五周年は、同八年九月十四日に行われ、七十七人が参加しました。今回は、五十周年の記念同期会です。現在、関東以北に在住の同期生は八〇人います。お互いに誘い合って、一人でも多くの友が集まることを期待します。

昭和二十年四月、憧れの県立静岡中学校に同期二五〇人が入学、中学・高校の青春時代の六年間を過ごしました。当時の世相は、有史以来曾てない大激動(空襲、被爆、家・学校焼失、敗戦、米軍進駐、物・食糧不足、慢性空腹感、二回の校名変更、三回の仮校舎移転、学制改革、ほか多々)のとき、あらゆる価値観が変わり、種々のことが激しく揺れ動きました。しかし、多くの苦難や不安を一つ一つ乗り越え、未来を信じて共に学びスポーツに励み、友情を深めました。

あれから半世紀が過ぎた今、知る限りでは四八人の友が帰らぬ人となっています。この節目の同期会で、友を語り友と話して、楽しく有意義なひと時を過ごしませんか。会場で、貴兄とお会いしたいと思います。是非、ご出席下さい。(小杉 弘)

六四期 第32回ゴルフ会

木犀の香り漂う10月12日、伊豆大仁CCに25名が参集、季節はずれの暑さの中で、全員汗をかきかきラウンドしました。

優勝は佐野旭。春先、清水先輩(61期)から指摘された「左グリップ」に留意した結果の満足すべき成績(グロス94)。準優勝は、上位常連の蛭川博之君(グロス93)。

ベスグロは渡辺進式君の89。出場のたびにベスグロを獲得する実力者だが「このスコアでベスグロは恥かしい、更に精進を……」と憎らしい挨拶。ニアピンの蛭川博之君、稲森照男君、塚本光彦君の3名には、「ハンドルを握らずに、楽をしてコースへ来た人達だ」と、やかみの声あり。

前回から参加の村松敏雄君は、今回もメーカーだったが、「私がいる間はメーカーを引受ける」と苦しくも力強い発言に、プービーの小沢義郎君も「皆さん安心してプービーを狙いましょう!!」と恵のり。お互い衰えた体力は舌鋒でカバー。とばかりの楽しい一日でした。

また今世紀の締め括りとし



て(大ゲサです)、過去の「桶獲得枚数」が発表され、最近の参加者を除く全員が、一度は表彰された実績を確認し、来世紀からは、新ハンデにより再スタートすること決定。渡辺進式君の音頭で「岳南健児」を斉唱、来春の再会を約し散会した。

参加者、前出7名の他、石原良昭、伊藤剛、井上公司、

漆畑茂、漆畑輝夫、風間政彦、川口実、鈴木高保、時田勝博、岩本吉雄、神谷武男、永田進一、野沢正憲、村上喜代二、山本和彦、渡辺宏一、大石次男兄(61)、清水昭彦兄(61)。

七三期

なんと素晴らしい集い

この静中・静岡関東同窓会が始まったのが昭和五十年の六月、日比谷で開催された総会であった。

昭和三年に卒業して十八年経ち三五歳前後になった頃、その第一回に参加した七、八名が発起人となり関東地区には七三期の同期生が大勢いる筈だから皆で名簿を作って同期会を結成しようと呼び掛け合い、その努力が実って瞬く間に同期卒業生三百七十名の約三分の一に当たる百三十名の関東在住者名簿が完成し、毎年関東同期会を開催してきました。

それでも年一回の同期会とはいえず最初は会社勤務や家庭の都合やら個人的にまだ参加したくないと言う事情があったりして二十名から三十名が参加をすれば良い方でありま

◎稲森照男君。…永年に亘り静岡県ハンドボール協会会長職を勤め、その功績が評価され、スポーツ功労者として、文部大臣表彰を受けました。お日出度う。(佐野 旭)

したが、年々歳々の変化により公私共々の利益のためにもそれぞれの分野で活躍する同期の友情が有り難く、集う事が楽しみとなってきました。

同期会を開催するに当たり三名から四名の当年の幹事役が会場、日時などに趣向を凝らして楽しい集いを催してきてここ数年前より参加者も年々増えて、六二歳にならんとする今年当たりも、五十名を超える参加者となってきました。まだ現役で勤務をするもの、また定年退職をし、時間的にも余裕ができ、人恋しいお年頃にもなってきたのでしよう。近年参加者が増え卒業以来の同期会初参加という有難い参加者もありました。

会費の納入も最大のグループである事は事実であります。当然のことながら食事、料理が目的ではなく昔懐かしい友だちの顔、豊かな心、楽しい

い会話が最大の料理であることは同期生全員の意識であったのは事実であります。

共済会館やクラブなどの非営利の場所を借りるのがよろしいと思う。良い会場を知る者同士が情報を交換し合い各卒業年次の幹事が同期会を開催しやすく助言出来る事が必要でしょう。

各年次の方々の益々の交流と発展を切に祈念致します。(山梨由記:047-478-6906)

グランドビル市ヶ谷(防衛庁共済会館) 03-3268-0111

アルカディア市ヶ谷(私学会館) 03-3261-1992

正井丹吾亭・京橋 03-3271-8432

七四期 関東地区同期会

去る九月十日(日)の午後、まだ暑さの残る東京小石川後楽園で久しぶりに開かれた。

集まったのは、石川富規夫、稲葉一宇、井上進、角谷治子、川口弘、金子富雄、菊池芳彦、熊谷敦子、桑原伊玖子、桑原英明、佐藤鐘司、佐野捷造、曾根博義、田中佐知子、塚本豊、中村牧子、萩原茂春、藤原経史、細川紀子、松下晴一、望月徹弥、望月保、矢沢国光の二十三名。

昭和三十年四月入学、三十三年三月卒業のわれら同期生は、昨年从今年にかけて揃って六十歳を迎えた。

定年に達してしょんぼりしている連中が多いのではないかとと思ったら、長年の勤めから解放されて、待ちに待った第二の人生を楽しみはじめているという元気な仲間が多かったのは頼もしかった。

名札を見ないと名前が思い出されない顔がいるのは、相手の風貌の変化のせいとか、こちらの記憶が衰えたせいとか、どちらとも決めかねるが、話す間に卒業以来四十二年の時の隔たりを越えておたがいに

打ち解けてくるのはうれしい。昔は話しかける勇気もなかった、しかも今なお美しい才媛たちと気軽に口をさけるのは、もつとうれしい。

酒徳亭で会食の後、水戸藩徳川家ゆかりの庭園を散策。卒業以来東京に住みながら後楽園の庭園は初めてという者もいるし、庭園より、木々の

向こうにそびえる東京ドームの屋根を間近に見て感激する者もいるが、ここではおたがいに何でも許しあえるような気分になってしまふ。

しかし第二の人生を飛び越えて、第三の人生に入ってしまった仲間のお知らせを聞くのは悲しく寂しい。今年に入って亡くなったという小野田幸

弘、近藤豊美、山脇伊久男の諸君の冥福を祈りたい。

だいぶ暇もできたし、次の会で計報を流されることもないように、これからはなるべく頻繁に会を開いてほしいと、今回の幹事を務めてくれた佐藤鐘司、松下晴一両君にみんなでお願ひして散会。ええつけやあ。

(S)

七七期

東京静岡合同ゴルフ会

第1回：7月19日、朝霧ジャンボリーGCに静岡8名東京8名の合計16名が集まる。(上の写真) 実力差は如何ともしがたく、優勝・準優勝とも静岡組の鈴木秀寿君と、石川進哉君、またベスグロも小澤智吉君が4オーバーの76でした。秋には同期の栗野吉洲君が社長を勤めるバイロンネルソンCC(福島県)で連続2日プレーすることになりました。

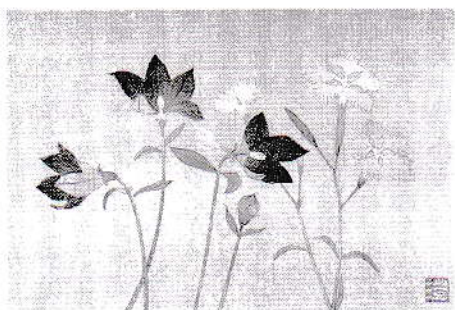
第2回：10月15日は静岡組7名(40余キロの遠征)と東京組は常磐道の守谷PAにて合流、到着してすぐにアメリカンスタイルのコースとグリーンにいとみました。静岡組の小澤智吉君の優勝と75で回った花城政夫君のベスグロが光りました。天然温泉の大浴場で汗を流し、夕食と懇親会、さらにコテージ(立派な個室とリビング)で酒豪たちは快気炎を上げました。翌16日は二日酔いに苦しみながらも皆完走し、優勝は東京組の村松貴彦君、一矢をむきました。パーティーでは還暦をどのよ



うにむかえるか話題になり、記念誌の発行と静岡での行事を考えようと前向きな方向になりました。

文中以外の参加者：佐々木康年、水野泰宏、岡谷彪、渡辺尚、滝口智彦、菊地基介、杉山久治（以上静岡）、石間啓一、松井義之、石山建一、三浦位通、野方重人、栗田収司、牧野賀博、岡村稔（以上東京）。

（清水雅尚）



「ふるさと静岡の花シリーズ」

キキヨウ・ナデシコ

小川澄彦画

（P14、小川龍彦さんの

次男で）活躍中）

第53回江の島会

平成12年9月3日、恵比寿屋旅館で開催され、岳南健児健女57名が集まった。

会は黒田秀幸氏（67期）の司会で、まず永野江の島会名誉会長、奥沢関東同窓会会長等亡くなられた方々への黙祷が始まった。

堀尾弘和母校教頭が、最近の母校の活動状況を話されたが、昨年と違い野球部の甲子園出場がなかったためか、心なししみりとしたものであった。続いて同窓会副会長の角替弘志氏（70期）から創立百二十五周年の記念行事について、その準備状況等の説明があり、一層の協力をお願いしたいと挨拶があった。

なお、特に戦後の混乱期に在学、卒業した60期代の皆さん方に、アンケート調査と、記念誌作成のための資料収集を呼び掛けているが協力願いたい旨の話があった。

続いて上杉重吉関東同窓会長（60期）から関東同窓会の活動状況と、皆さん方が健康に留意して益々活躍してほしいとの話があった。

総会は事業報告、会計報告、監査報告が全員一致で承認された。また、江の島会会長として黒田秀幸氏、会計に雨宮明生氏（68期）、会計監査に後藤弘枝氏（71期）を選出することも承認された。

その後初めて参加された方々の自己紹介があつて総会を終了した。

懇親会は甲木怜氏（79期）指揮で校歌を四番まで高らかに歌い、遠路はるばる青森県弘前から出席した塚本浩司氏（68期）の音頭で乾杯し宴会が始まった。

最後に道遥歌を歌って一次会が開きとなったが、江の島会の特徴は橋のたもとの屋台「いそみ」で沈み行く夕日を眺めながらの飲談である。名残りは尽きなかったが、来年の再会を約して江の島に別れを告げた。

なお、総会と懇親会の席で亡き永野清名誉会長及び奥沢徹江の島会幹事のご遺族から故人が生前に賜ったご厚情に感謝するとのご挨拶があったことを付記する。

（68期 雨宮明生）



回想・随感など

静岡の万葉を歩く

(その二十一)

51期 原崎 郁平

静岡県立掛川西高等学校の校舎中庭に万葉歌碑が建っている。

父母も 花にもがもや 草枕旅は行くとも捧(こ)めて行かむ(巻二十一四三二五)

天平勝宝七歳 乙未二月

佐野郡・丈部黒當

昭和五十二年八月 掛川市

垂木の人 中山正氏建立

静岡県小笠原郡大東町の人

大石初太郎書

大きさ……高さ百五十センチメートル、幅七十二センチメートルの自然石である。

歌の大意は「お父さんやお母さんが庭に咲いている花々であつたらなあ。私はこの花をお父さんお母さんと思って捧げ持っていこう」である。

丈部黒當は防人として出発する時、今日まで育ててくれた両親に感謝の意を込めて歌ったものであろう。枕詞の「草枕」という言葉を使った



ことから想像すると丈部黒當はある程度の学識を持っていた人である。花はどこにも咲いているが、ここでは丈部黒當がとりわけ好んでいた花である。その花を見て両親を花に例えたかったのであろう。

防人として旅たつ矢先に、両親との別れと、目に入った好きな花と混同してその辛さを協調している。天平勝宝七年(七五五年)の二月は、防人の任期交代の年であり、丈部黒當は新たに防人の任命を受けて旅立ったのである。いつかは来るであろうと思っていた朝廷からの命令が現実となった今、両親との別れの心情を切々と歌っている。このような両親を慕う心や両親への畏敬の気持ち、人の魂を揺さぶる。

掛川市の掛川城の一角に「大日本報徳社」がある。この報徳社は二宮尊徳の報徳運動の発祥地として知られている。一九〇三(明治三十六)年に建てられた大講堂の偉容が有名である。大日本報徳社

長倉秀男君を偲んで……

76期 鈴木 浩

長倉秀男君が亡くなってからまもなく1年が過ぎようとしています。

彼とは高校1年の時に同じクラスになった。色白で体格のよい彼は何かと目立つ存在でした。少しつづばった感じながら応援団の一員として又スポーツの大好きな(たしかラグビー部)男でした。

卒業後20年以上たった頃、関東同窓会で再会、高

校時代とまったく変らない雰囲気で大変元氣そうで、起業家として活躍されていました。

情に厚い、世話好きな、そして何よりも静岡を愛してやまなかった彼。最後の年に母校の甲子園出場チャンスがあったのは、せめてもの幸せであった。彼はこれからもずっと静岡を応援しつづけて行くことだろう。御冥福を心から祈ります。

きものと知れ」とある。

掛川城は、一三〇〇年代に斯波氏の家臣鶴見氏三代によつて砦が築かれたのが初めてあり、その後、今川氏の家臣朝比奈氏により築城された。徳川家康がこの城を壊そうとした時に、霧が出て城を覆い隠したという故事から、この城を別名「雲霧城」と呼ぶようになった。徳川家康が開城した後で家臣石川家成、康通父子の城主を経て、山内一豊が入城した。今の掛川城は平成六年になってからの復元である。

は二宮尊徳の教えをひろめるために一九一一(明治四十四)年に全国各地の報徳社を合わせて掛川に結成されたものである。初代社長である岡田良一郎は幼少の頃、二宮尊徳に直接指導を受けている。岡田良一郎は掛川中学校校長と衆議院議員を勤め、その子の岡田良平と一木喜徳郎の兄弟はともにその後、文部大臣となっている。掛川市は現在でも県内一の生涯学習の町である。報徳道歌には「道徳ならぬ経済は永遠の道徳なし、経済ならぬ道徳は労して功無

自らを叱る

53期 大石 巖

創立百二十五年を迎える母校静岡中学にお世話になったことは、誇らしくも嬉しいことである。何か想い出になることを書き綴ってみたと思っただけ、どうも忘れっぽい性癖が水準より高いらしく、鮮明に蘇るようなものが少ない。

かねて刹那ベスト主義と銘打って「過ぎ去ったことはよくよしてもはじまらない。明日のことはいくら考えても予知できない。いまありったけの力をしほって、これがベストと思われることをやるしかない」と考えて、生きてきたら、もう八十年を数える。なまけものの人生哲学が、自らを納得させる窮余の策だったのであろう。記憶の鮮明度が薄いのも、過去にはつとめてこだわらないように努めていた故かもしれない。

この四月、私は最後の職場、新日本証券が合併で新光証券として再生を期してスタートした機会に、会社人間を捨ててしまった。四六時中会社の

ことばかり考え、起きている時間の大部分を社務に費消していることだけで、何か世のため、他人のためになっているという思いにやささかの疑問を感じず、ささやかな喜びを味わっていた。それは他人はどう評価しようとも自ら納得できる安らぎでもあった。会社との別れは、生き甲斐にも通ずる幸せを無残に奪い取ってしまった。

これは想像した以上に痛烈なショックになり、新しい生き方に適応する姿勢を整えるのに、多少時間もかかりそうな気がしている。

それにしても、一九八〇年代世界のトップに躍り出ようという勢いに溺れて、世界が生きたために血のにじむような自己改革していることを嘲笑しているかに見える傲慢さのツケは痛切に回って来た。バブルとその後処理は力のあるうちに清算すべきだったのに、光を失った日本システムの改造に遅れをとり、「日本の一人負け」の形でこの十年を失い、なお浮揚力がか細く、次の十年も失いかねない不安な状態が続いている。いま

「独り勝ち」のアメリカだつて一九七〇年から八〇年にかけて日本に押されて辛い時があつて、今のシステムを定着させているのだから、日本だつて出来ないことはないはずである。

森内閣がIT革命を国家的課題とし、税制改革や教育改革を急ごうとしているのは、変化への対応力を柔軟で強力なものにするために当然の宿題であらう。

私はこの変化を必然の成行きとして容認しながらも、今更パソコンを操作しはじめることなど全くその気がなく、時代から取り残されることを覚悟している敗残兵である。そんな奴の話など役に立たないかも知れないが、教育に関連して、私見というよりも、どのような教育環境の中で育ったかを自伝風に書いてみたい。新しい教育制度は、これからの若者諸君に期待するところが大きいだけに、関心があるのも当たり前だろう。

私は大正十年二月、静岡原磐田郡龍川村相津という山村に生まれた。浜松から天竜川を溯ること五十キロメートル

ほど上流の人工造林地帯のほば出口にあたる。家業は林業、その次男坊が私だった。幼稚園はなし。小学校は相津小学校といい、生徒が少ないので、一年と二年、三・四年と五・六年と三学級。先生は校長の他に男と女の先生が夫々一学級宛受持っていた。二年を合わせてもせいぜい十人程度の生徒しかいなかった。半分は当然自習となるので、先生は色々工夫されたであらう。ただ一年の時には二年生の学習を自習時間に見聞しているのが概略は知つてしま

う、三年の時は四年、五年の時は六年の教科をあらまし頭に入れるという便利さはあつた。

小学校五年の時、静岡市城内尋常高等小学校へ転入。兄姉が静岡に移っていたので、家が静岡市安東にあり、余り大げさに意識するほどの問題はなかった。

静岡中学へ入学、野球部に入りたかったが、意志薄弱ですつかりゆかず、三年秋になると新メンバーが足らず、練習試合に何試合か出たが夏の本番を前に退部した。学校

の成績が三年までぐらひは二百名中五十番以内にあつたが、野球の練習に参加して、英数国漢の高等学校入試以外の教科を捨ててかかったの

で、三年から四年になるときは百数十番に落ち、家族、とくに父母との約束を破る結果を生んでしまったので、自らの志をまげて退部してしまつたのだ。

学校の総合成績は半ば以下だったが、四年、五年を合わせて模擬試験というか、進学の要件を考えた実力試験というものが屢々行われていた。これではいつも三十番以内に位置していたので入試にはそれなりの自信があつた。

四年終了の時、地元の官立静岡高校を受験。その年は四年から高校進学者が比較的多かったが、私もその中の一人だった。これからは意気揚々と野球に集中、インター・ハイでは決勝一回、準決勝一回と今一歩で全国優勝という口惜しい思いを残した。「試合で負けても、練習では負けるな」をモットーに、野球漬けの高校生活に悔いはなかった。

学業成績は比較的よく三十名定員のクラスで常に一ケタの好順位にいた。しかし一年の時は数学、二年の時は物理、化学、といった、今のITに縁の深い科目は、生理的に嫌悪感が湧いてくるほど苦手で、「戊」進級のときはいつも「本年進級は許さないところだが教授会の協議により特に進級を許可す」という角判が附いていた。野球部長で担当主任教授だった永井順先生から「余り僕に頭を下げさせるな」と笑ってからかわれたものだ。

昭和十五年静岡大火後まもなく大学入試、東京帝国大学法学部を志し、「社会と個人」についての論評と、「徳川幕府の鎖国政策について」というのが問題だったと、これだけは不思議に覚えている。運よく合格。

野球部に入ろうと思ったが、肩を完全にこわしていて、塁間の短い距離でも山なりの球しか投げられない状態で選手を断念、宿怨の高校野球の手伝いになればと、諸先輩のすすめもあって旧制静岡高校の監督を引受けた。

それからは東京大学静岡分校といわれ、大学は入ったが、教室には全くの御無沙汰。有名な先生方の顔も見ずに終り、単位だけは取って卒業した。

就職は毎日新聞。見習いで歩きはじめて間もなく入隊、名古屋の輻重聯隊。幹部候補生にはなる気がなく、「首尾よく幹部候補生には落第した」と友人に書いた手紙を読まれてなぐられたことを覚えている。

昭和十七年秋から昭和二十八年八月までの軍隊生活が終り、九月から毎日新聞東京本社へ帰る。社会部のいわゆる「サツ回り」から始まり、主として経済部記者生活に明け暮れる。手とり足とり教えてくれる人もいないので勝手気儘の記者だから、よくも悪くも、自分のことはすべて自分の責任になるのだ。

昭和二十五年に結婚、麻布霞町に住み、五十年余り、その場所に住みついている。商売柄、家で夕食をとにもすることは年に何回あるか、数えるほどしかないまま今日に至る。記者として特記するよう

な功名もないが、年を経て、取材先との親交が深まると、足でネタを集める無駄な努力が怠られて、電話取材で要領よくまとめる記事が多くなる。若い記者の一見無駄と見える記事と比べるといかにも淡泊で味がない。敗北感が起り、かくてはならじと自らを叱咤するのだが、楽をすることに馴れてしまうと、汗と苦労がどうしても億劫になる。

昭和三十四年大毎オリオンズ勤務を命じられ、プロ野球に関連する仕事につく。そこで営業部長として商売の味を知る。負けたら客が来てくれない、雨が降れば閑古鳥が当り前のように通用していた野球商売に、もつと創造的で意欲的な方法はないかと、スポンサー、マスコミは勿論、客席に座ってお客の声を直接に聞いてみたり、毎日が成果は乏しくても、何か充実を感じた二年間の球団生活も、毎日新聞が球団を手放すことになったので心残りの多かった仕事ではあったが、ここで終わった。

大商証券の新生活は昭和三十六年の春から始まる。毎日

新聞にはお世話になりつ放しで、恩こそ感じるが、わがままを許してもらい、縁もゆかりもない大商へ入社。仕事は技術的面こそ違っても、自分を売りこむことに変わりはないと、不安というよりも、未知のものに挑戦する喜びを感じて転職した。

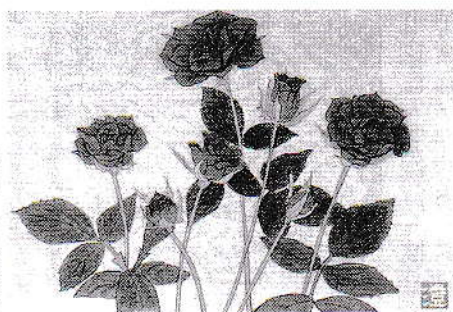
どうせ無からスタートするのだから、未知の土地で修行したいという希望が許されて大阪、続いて福岡と約五年間単身赴任の証券マン生活。すでに四十歳になっていたが、大学出身の若者たちと一緒に苦楽を共にしたこの五年が、その後の私の会社生活にとって貴重な経験となった。

中間管理職から四十年合併により大商が新日本証券となったとき役員となり、十年余り経過して昭和五十三年に社長就任。六年勤めて会長、四年後に相談役となり、平成十二年四月、新光証券誕生と共に退任。

思う存分の人生、好きなことだけに努力ではなく、欲深く可能性を追い求めた人生、それは自我に目覚めた青年の時から一貫している。教育は

画一的、平均的ではなく、個性を尊重する方向で再検討されるであろうが、それは学校だけでなく、家庭でも社会でも、広く、あらゆる場で開かれていくはずである。個性は各人千差万別、一人として同じものはいない。それぞれの個性を磨き、何か少しでも他人に役立っていることに喜びと生き甲斐を感じられることが出来れば、幸福で活力のある世の中が実現するはずだ。

私も、いま会社人間からの離脱に調子を崩して迷っているが、今こそ自分を叱ろう。「お前はお前でありようがない。しっかりせよ」



ミニバラ 小川澄彦画

小川龍彦著

「思い出のしずおか」

54期 居初 良雄

昭和15年1月15日昼過ぎに
出火した静岡大火は500戸を焼
失するという大災害であつ
た。安倍川橋に近い新富町か
ら出火して、強い西風で飛び
火し、午後3時頃には全市十
数か所で火の手があがつた。

私達は市内の西草深に住ん
でいた。私は前年の春に静中
を卒業し、旧制の静岡高校理
科甲類の1年生であつた。当
日は父母ともに上京中で、私
は通いの家政婦と留守番であ
つた。曇り日で、午後学校か
ら戻る頃は強風ではなかった
が、午後3時頃からは、友
人・知人から火事のニュース
が入って騒然としてきた。

私どもも二階から延焼の様
子を眺めながら逃げ腰であつ
た。それでも何回か、仲町・
馬場町まで様子を見に行つた
が、凄まじい火力の勢いと煙
と異様な臭気で仰天し、それ
より先へは進めなかった。
風の方向を見て、西草深の
辺はどうやら安全と考えられ
た。夜は家政婦も帰ってもら

い、私一人になったので、専
ら屋上からの監視ということ
になった。暗くなった夜空に、
西から南へ、それから東の方
まで、まるで市を取り巻くよ
うに燃え続く火の帯は、誠に
恐ろしく、歴史書でよむ都市
の戦災による壊滅を「劫火」
と表現するのは、このことか
と戦慄を覚えた。

後年東京に戻ってから、戦
争末期、昭和20年の3月10日
の下町の空襲は翌日そこを通
つて行つたり、5月25日の京
浜の大空襲も、応召中ではあ
つたが、翌日避難した家族に
会うことが出来た。しかし、
火災による喪失感はずいぶん
の方が遙かに甚大であつた。

この奇妙な感懐は、私が昭
和10年3月に初めて静岡市へ
来て、この静岡大火に遭遇す
るまでの約50年の体験が、
生涯忘れ得ぬものだったから
である。

いたと言われた。

そのような理由によるもの
か、父の勤める会社は、横浜
から静岡の狐が崎遊園地の近
くに移った。東京の家も二分
して、次兄と私が静岡へ来て、
母が双方を行き来する慌ただ
しいことになった。次兄は4
年に、私は2年に静中に転入
学した。

私は小児喘息で、寒さに特
に弱く、冬季は学校を休んで
ばかり。その頃は郊外といわ
れていたところに住んでいた
ゆえか、幼稚園から電車通学
で、中学へ入ると1時間前後
の通学が耐えられなかった。
静岡へ来てから、冬でもオー
バー不要、空気が暖かく、通
学はすぐ近くで大助かり。5
年生のときには、生まれて初
めての皆勤賞というものを頂
き、自分で驚く始末。きつと
「いじめ」に遭うぞと言われ
たのに、それは皆無。静岡の
人は陽気で諧謔好きで、気が
置けない。街が清潔で整って
いるので、自転車で大抵の用
事が済む。

その上、今川義元・徳川家
康・慶喜と続く歴史の重みと
いうか、落ちつきがある素晴

らしい都市。それが冬の強風
の1日で消滅したので、落胆
は大きかった。

この点を会う人ごとに話す
のに、なかなか分かつてくれ
る人が少く悲観していたところ、
3年ほど前に同窓会の会
報編集長の上杉重吉さん（60
期）に話したところ、「これ
ならきつとよろこばれると思
う」といって貸与してくれた
のが、小川龍彦著の「思い出
のしずおか」であつた。

焦げ茶の布張りの画集で、
各頁の上限に大火前の静岡市
内の街頭のスケッチの淡彩画
50枚が画かれ、下段には著者
の軽妙な解説とか、当時の挿
話が載っている。スケッチとい
っても名勝・旧跡というの
ではなく、市民が日常目にす
る市内の様子ばかりで、実
心の温まる絵と文章でした。

作者は明治43年（1910）静岡
市生まれの版画家で、この本
は中日新聞社が宣伝のため昭
和48年3月から静岡市民を対
象に発行した週刊新聞「中日
新聞ショッパー」紙上に連載
された作品を2年間分50回を
単行本として、昭和50年2月
に発刊したもので、昔を知る



静岡浅間神社の彫刻「竹に虎」

小川龍彦作

市民には大変な好評を博した
由。そのため、「続・思い出
のしずおか」が昭和51年2月
に続けて刊行された由。

葵文庫の屋上から見た駿府
城内堀の俯瞰図から始まるこ
の画集を見ていると誠に楽し
いので、この心境を理解して
もらえそうな生粋の静岡っ子
の山川林平先輩（53期）に見
て頂いたところ、予想通り激
賞された。驚いたことに、昨
年と今年の松坂屋の夏の古本
市で、この本を見付けて2冊
ずつ購入できたからと、1冊
ずつ恵贈にあずかるというこ
とになった。なんとも思いが
けない幸運に恵まれて、暇さ
えあればこの本を眺め、悦に
入っている昨今です。

霊峰富士の由来考

57期 影島 利邦

富士山は岳南健児・健女の
高い理想の象徴であり、日本
の霊峰である。八面玲瓏、東
海の天に独り聳立するその山
容は、優美、崇高、敬虔、神
威、畏怖そのものであろう。

富士を日本の霊山、聖山、
宝の山として崇敬する思潮
は、奈良時代の中頃、朝廷貴
族に定着しつつあった。萬葉
集卷三に、二人の歌人の作と
して、富士山を讃える歌が、
長短合わせて五首収められて
いる。一人は天平期（七二九
—七四九年）の宮廷歌人、山
部赤人である。「不尽山を望
める歌」と題して赤人は長短
二首を詠んでいるが、その長
歌で、「高く貴き駿河なる布
士の高嶺を」（岩波文庫）と
莊嚴に歌いあげている。いま
一人は同じく天平歌人、高橋
虫麻呂と伝えられ、長歌一首、
短歌二首があり、長歌で、
「日の本の やまとの国の
しづめともいます神かも 宝
ともなれる山かも 駿河なる
不二の高嶺は」（前掲）と莊
重に詠じている。いずれも富

士を神の山と観じ、朝廷の弥
栄と重ね合わせて、風格の高
い、調子の美しい言の葉とな
っている。

富士は日本の聖山となる
前、どのように考えられてい
たか。古事記、日本書紀、常
陸国風土記、萬葉集卷一四、
東歌といった文献を辿ってみ
ることにする。

古事記、日本書紀はそれぞ
れ、七十二年、七二〇年に成
立した。記紀と富士山とのか
かわりあいについて、詩人で
文筆家の宗左近氏が、「富士
山の謎」（縄文の系譜所収
新潮社）という一文を草し、
二つの謎をえぐり出し、鋭く
迫っている。第一の謎は、記
紀に富士山の文字がないこと
である。日本武尊の東国遠征
において、転戦の途次、富士
山は駿河、相模、武蔵その他
どここの国からも見えていた。
しかし記紀は富士山について
一言も触れていない。何故か。
大和朝廷は東国を征圧すべ
く、軍事作戦を展開した。富
士は敵方の信奉する山であ
る。ともに戴くことのできな
い山である。だからその存在
を無視した。第二の謎は、に

もかわらず、記紀の成立か
ら四〇年も経ていない天平頃
に、富士を聖山と見る考え方
が台頭した。何故か。大和朝
廷は東国の民を軍事的、政治
的に抑えるだけでは十分でな
いとみた。これを心服させな
くてはならない。それには異
国の民が神と仰ぐ富士山を、
朝廷の山、いな、日本の山と
し、これを景仰することが得
策と判断した。ここに一大転
回がなされ、黙殺された山は、
光り輝く宝の山、日本の守護
神となった。氏はこのように
説いている。

つぎに常陸国風土記と富士
山についてである。風土記は
七十三年、朝廷がその作成を
諸国に課した地誌である。常
陸国風土記は、現存する五つ
の風土記の一つで、七二六年
までには作成されていたとい
う。従ってその成立時期は、
記紀より後、天平期の前とい
うことになる。新嘗の祭の
日、祖神が山々を訪れ、富士
山に到り日が暮れる。一宿を
乞うが拒絶される。やむなく
筑波山に赴く。筑波の神は大
いに歓待する。このため富士
山は呪われて、常時雪が降り、

人が登らなくなった。これに
対し筑波山には人が行き集
い、たいへんにぎわった。思
うに、筑波山と富士山とは二
つながら東国の名山であつ
た。常陸ではお国自慢から、
駿河の富士をおとしめること
で自国の筑波を持ちあげる話
を作り、伝承してきたのであ
ろう。富士が秀峰であること
を暗黙のうちには認したもの
といえよう。

そして萬葉集卷一四・東歌
である。萬葉集で富士山をと
りあげている歌は、前掲卷三
の赤人と伝虫麻呂のもの合わ
せて五首と、卷一四に、駿河
国のもので収載されている
五首のうちの四首である。
この四首はすべて相聞で、同
巧異曲の感があるので、最初
に掲載されているものを代表
として記すこととする。

天の原富士の柴山木のくれの
時移りなばあわずかもあらむ
早い話、相聞の舞台に富士
山を設定したもので、山は必
ずしも富士でなくてもよい。
東歌の収録者、編集者が、駿
河国富士山と意識して採
録したのではあるまいか。因
みに、東歌の中に収められて

いる常陸国の歌は一〇首ある
が、いずれも相聞で、九首ま
でが筑波山を舞台にしてい
る。当時、大宝令が民衆の間
に、どの程度浸透していたか、
また土地所有権意識がどのよ
うなものであったか、分から
ない。しかし同令では、「山
川藪沢の利、公私これを共に
せよ」とある。今風にいえば、
山は入会の地ではなかった
か。おとぎ話の「おじいさん
は山に柴刈りに……」の柴山
ではないのか。富士山もまた
柴山の扱いであったろう。

富士山は標高三七七六米、
円錐形の火山である。地質学
者によると、富士山はこれま
でに三回、大噴火を起こした。
第一回は今から五〇万年ほど
前で、二三〇〇米級の小御岳
が造られた。第二回は八万年
ほど前で、小御岳を埋めこみ、
三〇〇〇米級の古富士とな
る。第三回は一万年ほど前で、
古富士を覆い、今日に見る富
士山が形成された。
五〇万年前は、原人の世界
で、人類文化の始原の時代で
ある。八万年前は、旧人とい
ばれる古代型ホモ・サピエン
スの世界である。サハリン、

北海道、本州は陸続きで、今の日本海は大陸との間に挟まれた内陸湖であつたらしい。

一万年前は、地質学的には洪積世(別名、氷河時代)と沖積世との境目であり、文化史的には旧石器時代から新石器時代への移行期である。氷河が去り、気候も温暖となつて海面が上昇し、日本列島は大陸から切り離され、日本海も内陸湖ではなくなつた。そして列島には縄文人が登場した。

この当時の列島の人口は、北海道・沖縄を除いて、二一九〇〇人、東海地域は二四〇〇人という研究がある。新しい富士山の生成過程は、人数は少なかったとしても、これを見た縄文人に強い衝撃を与えたに違いない。そして富士山に対する畏怖と景仰の念は、幾世代にわたり語り伝えられたであろう。アイヌ語で「ふじ」とは、「火の女神」を意味するという説がある。また人皇七代孝靈天皇五年に、琵琶湖が一夜にしてでき、その土が富士山になったという伝説が、室町時代の文献にあるという。江戸川柳は、「打ち出でて 見ればびっくり

孝霊五」などと面白がつている。いずれも富士山爆発のすさまじさの伝承の痕跡であるうか。

はるかに時が下り、稲作農耕国家の大和朝廷は、尾張以東に勢力を伸張させる。農耕の民と採集の民との緊張対立は、日本武尊東征伝説などを生みつつ、東国も農耕文化圏に編入されていった。この間、筑波山と富士山は、東国、いはば鄙の名山となつていき、駿河に富士山ありという意識が、都の人士に醸成され始めたであろう。ここに注目すべきは、聖山の信仰、特に泰山(中国、山東省済南市の南)の信仰が、日本にもたらされて大きな影響を与えたという見解である。これは古典文学の権威、中西進氏の所説(天と地の間、「旅に棲む」所収、中公文庫)である。中国では泰山をはじめとする五山を五岳と称し、天子が巡行して天を祀る特別な山としている。それは天にむかつて聳える神岳であり、神霊を降し、また国家を鎮護する。日本でもそうだが、中国でも、もともと山は神であつた。はるか昔、

周朝の時代、山は天を祀る場所となつた。しかも天を祀る権能を有するのは天子のみとされ、それは天子が天下万民のために祈る儀式となつた。聖山の思潮は朝廷貴族の継受するところとなつた。奈良時代の始めのことであろう。そして宗左近氏の説かれるよ

成功した日本、危機に直面する日本

59期 清水 汪

静中・静高関東同窓会が発足して二十五周年になる。まずは、そのことに祝意を表したい。歴代の会長、幹事役の方々のお骨折りに対し感謝申し上げたい。

しかし、その記念すべき今年の三月、奥沢会長が突然亡くなられたことは誠に残念である。ご遺族に対してはお慰めする言葉もない。そこで以下に、奥沢君という一個人の間像とこの二十五年の間の日本社会の変わり様を対比して、今の日本が直面する危機の根本原因について考えてみたい。もつて御冥福を祈る言葉に代えたい。

うな背景もあり、富士は二つとない山として、扶桑第一の山となり、国の鎮の山、鎮の神となつていった。地方区の名峰は全国区の霊山へと昇格した。赤人、伝虫麻呂の讃歌は、朝廷貴族の気分を十分に代弁したものであつたに相違あるまい。

奥沢君と私とは、昭和十九年静中卒の五十九期生である。彼は、運動部でも活躍し身体は丈夫な方だつたと記憶するが、社会にあつては自らの会社の経営だけでなく、法人会の世話など業界や地域の発展のためにも忙しく働いていた。その上に関東同窓会の会長職まで引受けてくれた。こうした多忙さが彼の寿命を縮めたことは間違いない。

例えば、戦時中に育つた我々の世代には「滅私奉公(自分の利害よりも公のことに優先的に尽くすこと)」の精神が焼き付いている。

静中の校歌と校旗にあつた「義勇奉公」という四つの文字は我々の血肉となつている。若しこれを「静中魂」と呼ぶならば奥沢君こそ正に

「静中魂」の人であつた。

ひるがえつて思うに、今やわが国は、「個人の自由」「自己責任」のみが強調され、「公を無視し」「私利を優先する」風潮が溢れている。これでは「個人栄え、国亡ぶ」ことになる。泉下の奥沢君は、さぞや嘆いていることだろう。

後を引き継いでくれた上杉君(60期)も「静中魂」では人後に落ちない立派な人格者であるだけに、決して無理をされないよう「ご自愛専一」をお願いしたい。そしてこの機会に戦後育ちの立派な諸兄弟が一日も早く会長の仕事を引き継ぐことを提案したい。

そこで二十五年前、関東同窓会が発足した頃に戻つて考えてみると、その頃、種類は色々あるが仲間同士の旧交を温める式の会が次々に生まれている。私の関係するものも二、三に止まらない。

そこには二つの要因が働いていたといつてよい。一つは、昭和二十年八月十五日戦争に負け、一面の焼野原の中から復興に立ち上がった日本は、欧米先進国に追いつくことを目標としてひた走りに走り続

けて三十年、遂に「ジャバン・アズ・ナンバーワン」と外国の人から称賛される程の経済大国になった。追いつたのである。豊かになったのである。二つには、この間の経済成長を担って来た世代の中核は戦前育ち、戦時中育ちであり、要するに「静中魂」の持ち主だった。彼らは亡き戦友の分まで働いた。戦争の負けを経済で見返してやろうとの情熱に燃えて働いた。

そして目的を達した今、ある人は定年になり、ある人は定年に近づき、過去を振り返り周りを見廻す心のゆとりを持つに至った。こういう中で色々の会合が生まれたのは自然の勢いであつた。

こうして関東同窓会は、「成功した日本」「日の昇る日本」を背景として、また母校創立百周年を前に生まれた。しかしながら、その後二十五年の間に、世界には一九八九年、昭和六十四年、ベルリンの壁崩壊という歴史的大転換が起こり、日本もまた平成へ改元となりバブル経済の崩壊が始まった。それからの十年、世界は新たな安定の秩序を模

索し、グローバル化の進む市場経済の中で経済戦争は熾烈化の一途を辿っている。その中で日本は、新しい世界情勢に対処する明確なビジョンを持ち得ず、政治、経済、社会、教育等、国の根本にかかわる分野で時代遅れとなった制度、システムからの改革が進まず、いたずらに混乱を重ねている。経済の低迷は長引き、教育の荒廃が叫ばれ、社会の安全に対する信頼も崩れよう

佐野彊作さん

60期 安田 正之

佐野彊作さんといつてもハテと首をかしげる人が多いかも知れない。だが第二次大戦たけなわの頃の軍事教練の教官ですでに少し背中がまるく、傷痍軍人記章をつけて左手で敬礼をした中尉ドノだといえ、思ひ出す人もあるだろう。

特に雨の日の学科と称する授業では、まず黒板に左手で大きく「〇〇短小」と書き、かたわらの竹刀立てから竹刀を一本抜き出して股間にあてがい、先端をピ

としていた。日本は、衰退の危機に直面しているといわざるを得ない。

こうなった原因について考えてみると、その根本は、日本人の精神のたるみ、成功からきた慢心であるとともに、戦後の教育の誤りともいえるべき「公の意識の否定」にたどりつく。さればこの危機を救う道は、「静中魂」に目覚めるところから始まるというたい。

ンコピンコと上下に振りながら、ニヤリニヤリと机間を廻って性教育をやった、あの御仁である。

人生二十五年と教えられ、一億火の玉だ玉砕だと、今にして思えば多くの人が平常心を失っていたあの頃、軍事教官でありながら佐野さんは一風変わった。いわば叩き上げの職業軍人の実戦経験にもとづく、訓練の極意のような部分を、ふと垣間見せてくれる時があつた。だから半世紀以上たった今でも、この人の印象は私には大変鮮明である。

昭和十八年、四年生の時だ

った。当時私は級長なるものを仰せ付かつていた。出来れば願ひ下げにしたい役目だったが、ひとつ有難かつたのは、軍事教練の時間にサーベルを吊下げて号令をかければよく、あの重い三八式歩兵銃をかついでグラウンドをかけ廻らなくてもすむことであつた。

ところでその頃、全国の中等学校や高等専門学校に毎年一回「査閲」という行事があつた。私たちの静岡中学にもどこからか現役の大佐級の恐ろしげな人が査閲官として来校し、終日全校生徒の軍事訓練の状況をつぶさに査閲した。そして最後に「おおむね良好である」などという講評を残して去る一大イベントであつた。

ただでさえ生徒を殴り飛ばし怒鳴りちらすしか能のないような若手の配属将校をはじめ、すべての軍事教官たちが彼等自身の評価にも関わることをとて、この一大イベントに向つて「ここぞ」と張り切る中で、佐野さんだけが落着いていた。特に、私達のクラスに与えられた、確か密集教練（五十人ほどの一隊が前後左

右様々に隊形を変えながら行進したり展開したりする訓練」という名前の課題に、サーベルを抜いて号令をかける役目になった私に対する、佐野さんのイベント対策教育は全く予想外のものであつた。

佐野さんはまず私に「進め進めと兵隊を殺して戦争に勝てるか」と言った。「兵は温存しなければいけないノダ（ノダはこの人の口ぐせであつた）。」密集教練の場合も同様で、必ず途中のどこかで息抜きをしなければ、演技は最後までうまく続かないと言つた。そして言葉をついで「部隊を休憩させようと思つたら、さりげなく日陰に誘導せよ。」とか「何時も立つたままでなく、折を見て『伏せ』や『折敷け（左脚を立膝にして尻を地面におろす）』を混ぜれば体が楽になる。」とも言ひ、更に「伏せの号令は早口に叫んだのでは何と言われたのか分らず、動作が揃わないから、必ず『ふうせえ』と伸ばせ」と、ひとつひとつが誠に実戦的かつ老練と言えるものがあつた。

佐野さんは縦・横の部隊

の、隊形や進行方向の変更方についても、いろいろ具体的に教えてくれた。実際にどんな号令だったかは忘れてしまったが、例えば、Aという隊形からBという隊形には移りにくい。隊列にデコボコが出たり駆け足になったりで見苦しくなり勝ちだから、いったんCという隊形にしてからBにもっていく。これなら皆も号令に合わせてやすく、体も楽できれいに見える。といったぐいのものであった。要するにクラス全員が最後まで疲れずに、最も見ばえのする演技が出来るように、全体の組立てを考へるというのが主旨であったと思う。

この時の密集教練は、辛口の査閲官ドノにも好評だったと後で聞いたが、すべては佐野さんの、当時の軍事教官にしては大へん珍しい、合理的な要領第一の教育のおかげであった。佐野さんがどこで戦傷を負ったかは知らないが、彼の率いた部隊はきつと実践に強かったのではないだろうか。

戦後まで佐野さんのお宅は音羽町の清水公園の近くにあった。奥さんが助産婦をして

おられて、ある時期、入口のところに「受胎調節実地指導」という貼紙が出ていた。奥さんのお仕事にきまっていたのだが、妙に佐野さんのあのピンコピンコが思い出されて、前を通るたびに可笑しかった。

「私のゴルフ」

あれや・これや

64期 佐野 旭

私がゴルフクラブを握ってから、かれこれ40年近くになります。

北関東地区に勤務中の32歳のときでした。赴任早々「これからの時代はゴルフくらい出来なくてはダメだ!!」との上司の言葉に惑わされて、ハーフセットを手に入れた(入れさせられた)のが運の尽き。先ず勉強せよ!と与えられた本が、攝津茂和氏の「ハウ・ツー・ゴルフ」。随所に朱線が引かれた、猛勉強の跡が窺えるものでした。

そんなに一生懸命やらなくても……、と思いつつも、それから毎週日曜日の練習場通いが始まりました。勿論自己流で沢山打って、早く自分の型を作ろうってなものです。

何しろ「ワシが良いと言うまでコースには連れて行かん、但し猶予期間2か月」という有難い?指示のもとでしたから。

晴れてコースに出た(連行された)のは、昭和38年3月27日、晴天の太田ゴルフクラブ。旧陸軍の飛行場跡で、時々、駐留米軍がパラシュート降下訓練をやるようなコースでした。

人生初のティーショットは、右OB、第三打同じくOB、何とかフェアウエーに出たあとも、トップ、ダフリ、やっと乗ったグリーンは、行ったり来たり……。

そして受けた指示は「バーの3倍の数字をつけときな!!」というものでした。

しかし、こんな事もありました。No3ホール、160ヤード、池越えのパー3。先達の3人は誰一人オンセせず、ティーグラウンドを降りかけて、「あつ、まだ居るか!!」とほとんど忘れられた存在の私の一打が「オン」。冷やかされるやら、誉められるやら。

「ゴルフとはこんなに気分の良いものか」とチョッピリ

優越感に浸ったのも昨日の事に様に思い出されます。しかしパーはとれませんでした。パット数も覚えていません。その後十数回に亘るラウンドで、このホール一度もワンオン出来ませんでした。正にビギナーズラックでした。

初ラウンドのカードは、何のタメライもなく破棄してしまいました。その後は一念発起(それ程でもないか)保存することになりました。時折取り出して、パートナーの顔、ウデマエ、チヨコレートの数など、昔を懐かしむ好材料となつていきます。

上司からは相変わらず「ゴルフやってますと言えろのは、100回以上コースに出た人だけだよ」などと戒められ、ひたすら大人しく、オトナシクしていたものでした。

当時は一日にワンハーフ、もしくはツーラウンドが当たり前という時代でした。

3回目にコースに出た日の第2ラウンド、ゴルフを始めて98ホール目(太田GCC No.8、200ヤードパー3)に初バーの珍事?が起き、「何と良い弟子を持ったものよ!」と先輩

在学中からお世話になった恩師、その子息が同窓生の中にもおられるが、佐野旭兄が安田正之兄の「佐野彌作さん」のご長男と知ったのは、本号編集中の最近のこと。続けて読んで頂けるのも奇縁(一)

達も大喜び。いや、ここでも冷やかしが半分でしたが、このホール、午前中のラウンドでは、8もたたいていました。やっぱりマグレでした。

かくして10回、15ラウンドしたあたりで、かの上司から、「そろそろクラブを買い換えたら……」との話。

「ワシの友人がゴルフを始めたと言っている、旧いクラブは彼に譲れば良い、一万円程度だよ。」

「そんな!!まだ一年も使ってませんよ、金も無いし……」の言い訳を言う間もあらばこそ、隣県のスポーツ店(ミズノの代理店)に連行され、「これと同じ記号のものを買い足せば、同バランスのフルセットをいつでも揃えられるよ」と言う店主の言葉と上司の相槌に、己の実力も省みず、上中級者用といわれた、マス

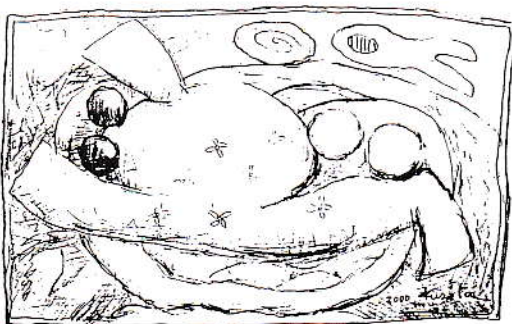
ターフラッグのハーフセットを購入してしまつたのです。この時すでにゴルフに魅せられていたのかも知れません。このマスターフラッグで、また珍事?快挙?が……。以下はまたの機会に。

二科展の 初受賞を果たして

64期 栗田 行雄

「今度はお前書け」ときたのは、我等64期の名幹事野沢正憲氏の彼らしい配慮です。

第一回目は一九八七年五十六歳で二科展に初入選したとき書かせてもらいました。第二回目は、一九九三年母校を描いた「故郷の学校」が入选したときで(この絵は長谷の母校に寄贈したので又機会あったら見てもらいます)、そしてこのたびは、第85回展記念賞を受賞したためです。



「無事カエル」

画像に確信あったのですがダメでした。セザンヌはリングひとつでバリ中をびつくりさせようと考えましたが、小生も来年は自画像でアツと言わせて見たいものです。

小学校5・6年の担任から「温和すぎて統率の才に乏し」と言はれ、静中るとき「象さん」から旧校舎の鉛筆デッサンに「秀」を一度だけもらったことがあったが、「銀行員時代」には事務能力一〇〇、管理能力0と評価されて、辞めた。

今父ちゃん、母ちゃんの画材屋を開いて、二十六年目に入りマイペースで好きな絵を描くのは、小生の性分に一番合っていると思う。ただ女房だけが、自己満足でなさけない、と言いますが、耳が遠くなり聞こえないことにしている。こんど書かせてもらうのは、会友推挙のときでしょうが、あと五年や六年確実にかかりそうです。

最後に自己宣伝をひとつ、来年九月、銀座ミハラヤで個展するときには是非見に来てください。

太極拳交流会に 初参加して……

67期 岡村 英二郎

どういう因果か、四〇歳前後から骨の関節部がだんだん硬くなってきた感じでしたので、テニスクラブを始めるという知人に頼み込み、テニスをやり出してから二十五年強が経ちました。

しかし、老化現象と重なり身体の硬化はなかなか改善されず、つまるところは前縦軸、帯骨化症という病名がつく程に、首の動きがままならなく、

腰の前屈は一二〇度、右腕はテニス肘となつて、腕を真直ぐ伸ばすと肘のところで少し曲ってしまいます。この先老いていく上に、こんな苦痛から脱却しておかねばと思い、一昨年世田谷区で開講している太極拳を習い出しました。

太極拳は孫式の簡化二四式でしたが、三か月の講習が終つても全くちんぷんかんで、講師に紹介されて太極拳教室に入り、週一回入門、初級、二四式と指導を受け始めて、ビデオを見、套路の解説図を読みながら、漸く套路を覚え、一応の演技ができるようになりました。練習前三〇分余の体操は、ストレッチや練功を取り入れたもので、教師の動きにはとても付いていけません。私には大変気持良い身体ほぐしとなっています。何せ腰が曲らず首も曲らずです。それで、せいぜい腰を落として演技することを心掛けていますが、この程、世田谷区連の太極拳交流会への参加を勧められて、思い切つて仲間との集団表演に取り組んでみました。

私達は、背に草書の龍の字

が書かれた黄色のTシャツに緑のスボンの装いで、隊列を十字形にして、私は縦列に並び縦列は初級を二回、熟練者が並ぶ横列が楊式の前半套路を表演することで進行を合わせ、最後に揃って収勢の動作で終るというものでした。美人教師の熱心な指導があつて仲間も大いに気が入り、交流会での表演はそれは素晴らしい出来栄でした(教師の話)。因みに、私達の仲間は男三、女七の割合です。よその教室の表演も見事なもので、なかでも、女性達のしなやかな演技が目につきました。老師というベテラン達の演武は、まさに大河の水の流れのように、花畑に囁くそよ風のように、そしてゆるぎない片脚の蹠足姿勢の華麗さ、全体を通して表現される緩やかな円運動はその極致を窮め、太極拳は武術なりという一つの概念を忘れて、美しい日本舞踊の世界にいるような感じさえ持たせてくれました。折柄、テレビで医師が、身体脂肪を燃焼させるには、ゆっくり動作の太極拳が最適であると話していました。

老人になりきれない 老人のたわごと

70期 大高 源之丞

我々七十期の卒業生は、一九三五年生れであるから、二〇〇〇年の今年中に（早生れの仲間も来年の四月一日までには）全員が六十五歳になる。厚生省の区分によると、六十五歳以上は老人である。

老人……。年寄り……。老人になるといふことは何とおぞましいことであろうか。

田舎にいて幼かったころ、それが何歳くらいの人を見ていたのかは記憶にないが、頭は禿げている、歯はぬけている、腰は曲っている、ゆっくり歩いては止まり、またゆっくり歩いては休む。そういつた年寄りたちを見ると、自分たちとは違った世界に生きる人、そう思いながらも何となく近寄り易く、話し易い、歩いていて転びそうになったら助けてあげたい、老人にはそんな感じを持ったものである。

そういつた印象を持っていた老人に、今年から自分になってしまった。自分は八月生れであるから、間違いなくそ

の仲間のひとりである。

その仲間であることは徐々にはあるが、自分の行動に現われてくる。朝、何十年と続いた目覚し時計をかけなくなったことである。朝は自然に目が覚めるといつてしまえばそれまでであるが、簡単にいえば、寝すこしても困らないからである。それに関連して、曜日の感覚がなくなった。城山三郎の小説に「毎日が日曜日」というのがあったが、まさにそれである。一週間がいつ始まったのか、いつ終わったのかの区分がない。従って週始めの緊張も、週が終った安堵感もない。新聞に日曜版が入っているのを見て、「あ、今日は日曜日だったか……」と思うくらいである。

曾て、私がある会社籍を置いていた頃、中学校時代の友人が突然、事務所に私を訪ねて来たことがあった。取り次いでくれた同僚が、「おじいさんの人が君を訪ねて来ている」と私を呼んでくれた。同僚は私と同じ年回りで、若かった頃から、三十年来机を並べて仕事を来ているので、互いに、互いが年をとっ

たことに気がつかなかったのである。初孫の写真はアルバムに収めながら、そのなかに、自分たちの新婚旅行の写真を見つけた時の面映ゆさと同じである。

しかし……である。だからと云って、現在の自分を「老人である」と自覚するのは大変に困難である。白髪になつたとはいえ、入れ歯のお世話になつていとはいえ、まだまだ息子にも周囲の若い人たちにも負けてはいられない。

七十期生が集まったとき、老人っぽい、あるいは年寄りのくさい仲間は誰ひとりいない。誰かが「おい、これから浅間神社の百段を、早足で登ってみないか!!」といったら、「オー!!」とおそろく全員が参加するのではなからうか。

近ごろ、家内によく言われる。「おとうさん、腰が曲つてくる!!」それに對し私はこう返事する。「最近うまいものを喰っていないからだ!!」

老いの訪れは自分ではなく、周囲が自然に認めるものではなからうか。それを自分が気づかないだけである。

同窓会の会員名簿を開くた

ある再会

71期 浦田 彰

「戸家は焼けても何のその……」

富士山仰いで立ち上がる
大静岡の意気と熱

「戸想へあの夜の紅蓮の炎裸一貫 興すぞ郷土……」

皆さん、こんな歌を聴いたことがありますか。唄うは霧島昇に音丸姐さん。題して「静岡復興行進曲」「静岡復興音頭」。昭和15年発売コロムビアレコード、ラベルには、静岡市選定歌とあります。

この年の一月十五日、市の大半を焼き尽くした静岡大火の復興に励む羅災者を励ます歌だったに違いありません。その歌を最近聴いたのです。ところはへと、北東北の景勝地八幡平のペンションで。発売時そのままのSP盤で。

さて、実は、お伝えしたい

にすむこのページが、だんだん前の方へ押し出されるようなことになつても、掲載される人数が、減らないことを願うものである。

のは、この歌のことではないのです。このSPレコードを手回し蓄音機で聴かせてくれたひとりの同期生のことなのです。

今年の春の某日、同期の良き悪友、篠原直君からの電話「オイ！米川の姉さんに会ってさ、岩手にいる弟がオレたちに会いたがっているとき」。風の便りに、はるか遠く岩手県八幡平でペンションを経営していると聞いていた同期の米川克己君のことです。

ということで、連絡が飛び交い、「行かざー、行かざー」と遊び仲間の衆議一決。七月半ばの土曜日朝、東北新幹線やまびこ盛岡行に飛び乗ったという次第。同行の面々は、私のほか同期の篠原直、伊藤勝、後藤弘枝、72期の山口公子、それに篠原の仕事仲間のF氏の六名。

青々と育った稲田の中を三時間二〇分……盛岡駅頭、満



面の笑みで迎えてくれた米川君、面影はあるものの日焼けの顔に幾筋かの皺。四十五年ぶりの再会でした。久闊を叙するのもそこそこ一路米川ペンションへ。山頂に霧を抱いた南部富士・岩手山を脇目に四〇分。ペンション「いーはとーぶ」は十和田・八幡平国立公園のど真ん中、白樺林の中に英国風のたたずまいをみせていました。

米川君が懐の深い東北の自然に惚れて、この八幡平に六五〇〇平米の土地を得て、念願のペンションを開業したのが昭和五十七年。八幡平はブナと白樺とカラマツの林がどこまでも広がり、牧草地と野

菜畑が点々と……。冬ともなれば一面の銀世界、スキーマッカとしても知られた景勝地です。

さて、部屋へ荷物を放り込むと直ちに近くの松川温泉へ。一風呂浴びてのご帰館。鼻の先に迫る南部富士に夕闇が忍び寄って、いよいよ再会を祝しての大晩餐会。まずは食前酒、米川君自慢の密造酒、ライラックやハーブ酒もさることながら、唐辛子酒というのが絶品。同じ静岡出身という律子夫人手作りの料理、とはいってもオールドブルからスーブと本格的なフランス料理が次々と。配膳係は長男の直利君。さすが都心のホテルで

修行しただけの鮮やかなテーブル捌き。親子三人、息の合ったサービスにすっかりペンション経営も板についた観ありと感心したものでした。

デザートの後は、伊藤君のギターにF氏のハーモニカでちよつとした食後のライブコンサート。福岡県から毎年来るという同宿の女性も仲間に入れて……。校歌・岳南健児も夜霧が流れる白樺林の中へ消えていった、というわけです。ちょうどその夜は、今世紀最後の月食、雲間の月が静かに欠け始めていました。

そして、月食の夜が更けて、やおら米川君が持ち出したのが古色蒼然たる手回し蓄音機と数枚のSPレコード。ゆつくりとゼンマイを巻きながら、今や日本に2店しかない銀座の専門店から購入したという鉄針を取換え取換え……聴きも聴いたり！灰勝の「新雪」、渡辺はま子の「支那の夜」、何と！淡谷のり子の「ラ・クンパルシータ」。これは絶品でした。エルマンの「トロイメライ」、シャリアピンの「ボルガの舟歌」……同宿のO嬢曰く「しやば祭」

って何ですか？」ん？ 右から印刷のラベルをそう読むのは無理なし。市丸姐さんの「祭ばやし」でした。

毎年、雪の降りしきる年の瀬の一夜、クロスビーの「ホワイト・クリスマス」や、L・ボンスの「アベ・マリア」など聖夜に因んだ曲を揃えた「いーはとーぶ」主催のSPコンサートは、このペンション村の名物とか。

そうです。そのレコードの中にあったのがA面「静岡復興行進曲」B面「静岡復興音頭」のレコードだったのです。

翌朝、カッコウの声に起こされた僕らは、朝まだき夜霧に濡れた八幡平樹海ラインをひた走り、あいにく霧に視界を奪われながらも、藤七温泉、後生掛温泉など東北の名物温泉を梯子したり、野趣豊かな南部蘆花を満喫したり、旅の終わりは「いーはとーぶ」の庭に一株の白樺の苗を植えて記念植樹(右下の写真と、東北の旅を堪能した次第です。以上が僕らの同期生再会の記です。時節がらペンション経営も楽ではない筈ですが、米川君は頑張っています。彼



もその一人ですが、静岡を遠く離れ、その地に根をおろし、花を咲かせ、実を实らせている同窓の士も多いことと思います。そうした同窓生にとつて何よりうれしいのは同郷の友との再会でしょう。四十五年ぶりの米川君の笑顔が忘れられません。

もしあなたが、新緑のブナ林の中で深呼吸をしたくなったり、藤山一郎の「影を慕いて」やコルトーの「幻想即興曲」を聴きたくなったり、ましてあの静岡大火に思いをいたし、「静岡復興行進曲」を聴いてみたいと思ったら、八幡平にペンション「いーはとーぶ」を訪ねてください。一報次第、盛岡駅まで米川君がかけつけます。

●念のため、

ペンション「いーはとーぶ」
☎〇一九五・七八・二四〇五

オリンピックに 魅せられて

73期 山梨 由記

昭和三十一年の十一月。静岡高校三年生の小生は各家庭には普及しておらないので街頭のテレビで見て、新聞で報じるオーストラリアのメルボルンで開催されたオリンピックに夢中になっていた。

特に日本勢の成績優秀なのはフリースタイルのレスリングであった。体重別の八階級の内フェザー級で笹原正三、ウエルター級でも池田三男が金メダルを獲得し、バンタム級では浅井正が四位、ミドル級では桂本和夫が五位に入賞し、この四選手が中央大学のレスリング部の現役・OBであった事も日本国中を沸かせたものです。(報知新聞公式記録を参照)

この結果を見ても世界中で最強なのは中央大学のレスリング・クラブであるとの評価を受けたのです。高校一年から柔道部に入り三年の始めに黒帯(初段)となつてはいたが当時の柔道は体重別になつておらず、どうしても身体の大

レスリングならば大学に入學して丁度四年生の時がローマオリンピックの年になるから、我こそゴールドメダリストだ、との強い願望を抱き中央大学に進学し入部金二千元を支払い新一年生となった。

何らかの運動部に在籍していた全国の高校三年生の強者がオリンピックを見て小生と同様の衝撃を受け、希望を抱いて入部してきたのは八十余名であった。二年生以上の上級生が二十六名なのに、この新入生の多きは今もって語り草となっている。練習の体力的苦しさで次々と退部をして四年生になったのは小生を含めて十三名であった。小生の西へ、西へ、ローマへの道程は残念ながら遠くなり、オリンピック出場は適わなかったのである。

本年に限らず毎回のオリンピックを見るにつけ小生の高校三年のあの頃と、その心意氣を思い出させるのです。本年も多くの青年が感動し、新たにスポーツに情熱を燃やしたの目標を持たれた事でありましよう。世界中のスポーツマン達よ、頑張れ!

残念! 静高野球部
来春の選抜出場を賭けた高校野球秋の県下大会は八月十

〈静岡だより①〉

残念! 静高野球部

来春の選抜出場を賭けた高校野球秋の県下大会は八月十

○県中部大会

静岡11-0静岡西、静岡2-4静岡商。同敗者復活戦静岡11-0榛原、静岡11-5清水東、静岡10-1清水工

中部大会は三回戦で静岡商に思わぬ敗戦となりましたが、敗者復活戦で勝ち上がり、中部5位で県下大会に臨みました。

○県下大会

東、中、西部の県下から八校ずつ、それに夏甲子園出場の浜松商が推薦で加わり、二十五校で展開されました。

一回戦

静岡(中部5位)
104042 11
000000 0

浜松西(西部5位)

(六回コールド)

静高バッテリー深田-萩原
静岡の長打○久保田、星、萩原

二回戦

静岡

150010120
003001200
6 16

富士宮西(東部1位)

深田、後藤-萩原

③榎林、石田 ③星

準々決勝

静岡

430100012
03042212X
14 11

掛川西(西部3位)

深田、後藤 増井、天野-萩原

④星 ③萩原2、榎林、久保

田、深田、星3、池田

ことしのチームは打力が看板です。中

部大会、県

下大会の八

試合で得点

は一試合平

均9・6。

二塁打以上

の長打は計

37本。一試

合平均5本

弱というす

ごい記録です。県内屈指の強力打線です。

一方、守りは県下大会の三試合で失策2ですから、堅塁といつていいでしょうが、問題は投手力です。

県下大会の二回戦の富士宮西戦あたりから主戦・深田が背中を痛め、痛み止めを飲んだの登板となりました。ポールが高目に浮き準々決勝で掛西に18安打を喫しました。静岡も本塁打を含む長打10本など19安打で最後まで粘りましたが失点が余りに多く、及びませんでした。

来年夏までに課題である投手力を整備し、捲土重来を期してほしいものです。

(68期 石垣 祐市)



〈静岡だより②〉

静岡HPの現況

いまやわが国ではIT革命が国民運動の如き感がありますが、母校・静岡でもインターネットにホームページ（HP）を開設し、OBや入試を控えた中学生などから静かな人気を呼んでいます。

静岡のHPが開設されたのは六年前のこと。担当の竹原英明先生（76期）の話では、毎年夏休みごろになると高校入試を前に、中学生諸君が希望校に一日体験入学し、その実態を知る機会としています。ところが実業校と違って静岡のような普通校では、とくに見学したり、体験するものがないのが実情です。最近では中学校でもパソコン授業があり、中学生にとっても使えなれたパソコンを使えば、受験勉強で忙しい時間を割いてわざわざ出掛けなくても済み、その分高校を選択する幅が広がるという一石二鳥の狙いがあるそうです。

静岡のHPには学校の沿革、教育課程、校内の施設、進路状況、文化祭などの行事、

駿府城や臨済寺など周辺の環境、静岡駅からの交通の便、それに部活動で運動部の歴史や実績、文化部の内容、更に百二十五周年記念祭のことなどが掲載されています。また、特別企画として野球部が甲子園に出場した折りには、選手の日記、練習内容、応援風景が登場し、毎日情報が更新されました。普段でも夏休みには一日四、五十件のアクセスがあります。この甲子園特集には十倍近いアクセスがあったそうです。

中学生からは「静岡の甲子園での活躍を見て大いに勇気づけられた」「県外の中学生ですが、静岡を受験したいがどうしたらいいか」などのメールが寄せられています。また、国内はむろん海外に住む同窓生からも伝言や意見が掲示板に集まり、親交を深めているようです。

中身については一応チェックしますが、まじめな表現が多く、このままインターネットが普及すれば「将来、同窓会の会報や名簿もこうした電子メディアに移行するのは」との予測も出ています。

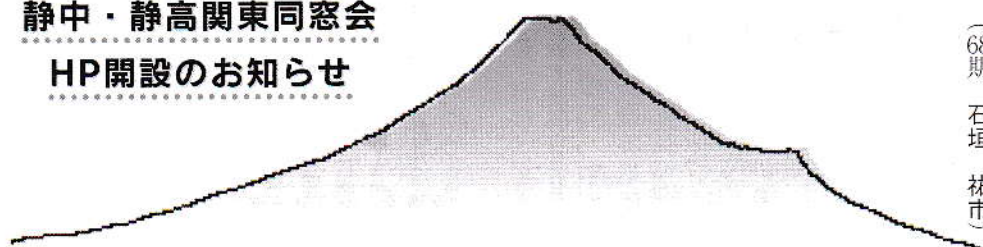
静岡のインターネットのホームページのアドレスは、

<http://www.wbs.ne.jp/cmt/shizuko/>

(68期 石垣 祐市)

静岡・静岡関東同窓会

HP開設のお知らせ



静岡・静岡関東同窓会においてもいよいよホームページ（HP）を開設することとなりました。当初は「お知らせ」「会報トピックス」「各期幹事」「リンク集」「歌集」の五つのページによる構成でまず第一歩をスタートします。まだまだ試運転の段階ですが、今後はHPの随時性・双方向性を生かした情報発信をめざしていきたいと思っています。会員の皆さんの御意見・御感想をお待ちしています。

す。HPのアドレスは

<http://club.pep.ne.jp/~stnfre/kanto/kanto-top.htm>

（なお、アドレスの打ち込み方ですが、「~」は欧文モードで「Shift」を押しながら「へ」、「-」はテンキー（数字を打つところ）にある「一」キーです。）

(87期 石川 嘉和)

ひとりひとりの

ご協力を!

○総会や同期会などの会合には億劫がらずに出席し、楽しい一刻を持ちましょう。
○年会費の拠出者が年を追って減少し、さびしいことです。関東同窓会の運営も難しくなってきました。

関東同窓会の円滑な運営のため平成12年度年会費（三千円）の納入をよろしくお願いいたします。

同封の振込用紙で、ぜひぜひ御協力ください。なお用紙は会報の毎号に年会費の納入済み、未納にかかわらず同封しておりますことをご諒承ください。

宛先不明のため、会報返送が毎号多数あります。住所変更の場合至急一報のほどお願いします。

○会報の広告掲載：年2回（2万円）にご協力をお願いいたします。詳細は事務局までお問い合わせください。



鈴 与 株 式 会 社

取締役社長 鈴 木 通 弘 (76期)

清水市入船町11-1

TEL 0543 (54) 3015 (秘書課)

京浜支社 東京都港区芝公園 1-2-12

TEL 03 (3432) 7151

日本レーベル印刷 株式会社

代表取締役 岩 井 平 一 郎 (57期)

本 社 静岡市国吉田3丁目1番1号

TEL 054 (262) 1111 (代)

東 京 中央区京橋 1-1-6 越前屋ビル8F

TEL 03 (3272) 4651 (代)

株式会社 富 士 越 株式会社 富士越化成

代表取締役 野 澤 正 憲 (64期)

東京都渋谷区東 2-14-9

TEL (3409) 3342 (代)

TEL (3400) 9541 (代)

自動車・火災・傷害保険

大 高 保 険 事 務 所

代 表 清 水 雅 尚 (77期)

渋谷区東 3-15-8

TEL 3406-9350

PHS 070-5103-8920

同窓会で人の輪を !!

野 方 重 人 法 律 事 務 所

弁護士 野 方 重 人 (77期)

〈事務所〉

〒101-0045 千代田区神田鍛冶町 3-7-3

蔵下ビル6階

(TEL) 03-3251-2348

(FAX) 03-3257-0820

☺ 昼 2 時より夜11時まで診療 ☺

タカラ歯科診療所

代 表 ^{ワラ} 藁 ^{シナ} 科 ^{アキ} 名 ^オ 雄 (87期)

東横線 中日黒下車 徒歩 5 分

TEL 0120-376480

相続税・法人税・所得税などのご相談はどうぞ！

鳥 巢 修 税 理 士 事 務 所

税理士 鳥 巢 修 (89期)

OSAMU TOSU

〈事務所〉

〒167-0041 東京都杉並区善福寺 3-31-3

TEL 03-3396-3858 FAX 03-3396-3848

E-mail: tosu@mtj.biglobe.ne.jp

調剤薬局……首都圏に28店舗

株式会社 アイセイ薬局

「医薬分業は 弊社へどうぞ」

代表取締役 岡 村 幸 彦 (93期, 応援指導部)

東京都中央区日本橋蛸殻町 2-14-5

TEL 03-5643-8225

E-mail: okamura@aisei.co.jp

◎事務局へのご連絡は:

〒153-0051 目黒区上目黒 2-18-13

山中ビル タカラ歯科医院内

静中・静岡関東同窓会

藁科名雄 (87期)

(電) 〇三三三九二二五八〇

(月) 金の午後1時~8時

◇「会報」編集子より◇

○毎号バラエティーに富んだ原稿を寄せてくださる方々に、心から感謝申し上げます。

同窓会員の絆をより強くとの願いをこめて、さらにより充実した紙面になるよう、一層のご協力をお願いいたします。

○各期幹事諸兄姉のご尽力で同期会を開催し、その報告を会報にのしどしご寄稿ください。

○原稿尊重を建て前としておりますが、加筆や訂正させていただく場合もあります。その点ご了承ください。

○提供の写真について、返却の必要があるかどうか書き添えていただければ幸いです。

原稿依頼や掲載広告について、候補と思われる方を事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

(U)